

Anticoagulation and Risk of Stroke Recurrence in Patients with Embolic Stroke of Undetermined Source Having No Potential Source of Embolism

佐藤, 倫子

<https://hdl.handle.net/2324/4475025>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏 名：佐藤 倫子

論 文 名：Anticoagulation and Risk of Stroke Recurrence in Patients with Embolic Stroke of Undetermined Source Having No Potential Source of Embolism
(潜在性塞栓源を有さない塞栓源不明脳梗塞患者における抗凝固療法と脳卒中再発リスク)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、塞栓症の原因となり得る潜在性塞栓源を有さない塞栓源不明脳塞栓症 (embolic stroke of undetermined source: ESUS) 患者において、抗血小板薬 (antiplatelets: APs) と比較し経口抗凝固薬 (anticoagulants: OACs) の使用が脳卒中再発のリスク低下と関連しているかどうかを検討した。2007年6月から2017年5月までに福岡脳卒中データベース研究に登録された初発急性期脳梗塞患者8790名のうち、潜在性塞栓源のないESUSと診断され、退院時に抗血栓薬の単独療法が施行された681名(平均年齢69.7±14.1歳、男性48.3%)を対象とした。Cox比例ハザードモデルとFine and Greyモデルを用いて、退院後の再発性虚血性脳卒中のハザード比(HRs)と95%信頼区間(CIs)を推定した。追跡期間中(平均3.4±1.7年)、再発性虚血性脳卒中の発生率(100人年あたり)は、APで治療された489名の患者で4.4、OACで治療された192名の患者では2.0であった。OACの使用は、多変量調整後も(多変量調整HR [95%CI], 0.42 [0.23-0.80])、さらに死亡を競合リスクとみなした場合においても(0.45 [0.24-0.85])、再発性虚血性脳卒中のリスク低下と関連していた。また傾向スコアマッチングコホートにおいても、APで治療された患者と比較しOACで治療された患者では再発性虚血性脳卒中のリスクの低下がみられた(0.32 [0.15-0.67])。以上より、潜在性塞栓源が特定されていないESUS患者において、抗凝固療法が血小板療法と比較し再発性脳卒中のリスク低下と関連している可能性が示唆された。